



文学部生になったら - 在学生・卒業生に聞く -

辻尾 覚平
(TSUJIO Kakuhei 3年生)
桃山学院高等学校卒業

1週間の時間割

	月	火	水	木	金
1	人文学講義		哲学概論		国文学演習
2					国語学概論
3	国語学演習	国文学概論	哲学演習		哲学演習
4		哲学演習	哲学演習	外書購読	西洋哲学史
5			日本国憲法	教育原理	

三年生になり、教養科目や言語の授業が減り、ほとんどが文学部での授業になりました。私の場合は専修である哲学系の授業と、国語の教員免許の取得を目指しているので国語学、国文学系の授業が多くなっています。また、水曜日と木曜日の5限に教員免許取得のための授業が入っています。

ある1日の過ごし方

10:00 起床。授業が午後からの日はゆっくり寝てしまいがちです。早起きして家のことをしたり、学校へ行って図書館で勉強したりレポートや課題などをすることもあります。

11:45 登校。
学食でお昼ご飯を食べたいときは2限の授業が終わる前にきて、学食が混む前にお昼ご飯を食べたいと思います。

13:20 3限 国文学概論。
国語の教員免許取得に必要な単位の授業です。事前に小説などを予習で読んでいき、講義を聞いてノートをとります。

15:10 4限 哲学演習。
アリストテレス「ニコマコス倫理学」の精読。こちらも事前の予習が必須になります。基本的には英語のテキストですがギリシア語ができる方は原文のテキストを使用しています。

16:40 授業終了。
この後はバイトに行ったり、学校に残って勉強したり、家に帰ってまったりしたりなどです。授業が少なくて楽に感じるかもしれませんが1、2年生のうちにはしっかり単位を取っている人は授業に余裕があり、全体の日は作っている人もいたり、自由な時間が多いんじゃないかなと思います。

1:00 就寝。次の日の予定にもよりますが、夜型なので寝る前は割と遅めです。

私は、高校生の段階で大学でやりたいことがはっきり決まっています。また、将来、教員になるという選択肢を消したくなかったので受験の際に文学部を選びました。文学部では教員免許のほかに学芸員の免許を取得することが可能となっています。もちろんその分授業は増え、しんどいですが、取得できない学部もあるため努力次第で取得できるというのは大きなメリットだと思います。また、文学部は留学などにも力を入れており、私の友人も何人か留学を経験しています。このようにやりたいことの幅が狭められないというのは文学部の大きな魅力の一つだと思います。

3回生になると、余裕ができて、将来について考えだす人も多くなります。就職について情報を集める人もいれば資格を取ったりする人もいます。もちろん、自分がしている学習についてより深く学びたいと思ったり、大学院に進もうと考えている人もいます。この多様性こそ私が文学部を選んでよかったと思う理由の一つです。自分の興味のある学習をしっかり学び、それだけでなく、他に自分のやりたいこともできる。なので、文学部は、学びたい学習や興味のある分野がまっている人はもちろん、はじめてと大学でこのことや将来のことを決めていないひとにもおすすめの学部です！



皆木 理香子
(MINAKI Rikaco 1年生)
四天王寺高等学校卒業

1週間の時間割

	月	火	水	木	金
1		英語学演習	English Communication		初年時セミナー
2	English Literacy		健康・スポーツ実習基礎		知識システム入門
3	哲学入門	社会文化入門	情報基礎	史学入門	西洋古典語(ラテン語)
4	文学入門	ドイツ語初級		ドイツ語初級	人文学導入演習
5		西洋古典語(ギリシア語)			

高校時代と全く異なる世界に戸惑いつつも、毎日楽しく過ごしています！大阪出身ですが神戸までかなり遠いので寮に入りました。掃除、洗濯、買い出しと、自分でやるようになって初めて、どれだけ家族に支えられてきたかを痛感しています(汗)

ある1日の過ごし方

6:00 起床。
7:00 徒歩で学校へ。周りは高級住宅街で、登校するだけで目の保養になります(笑)
7:40 大学に到着。文学部の中庭で、1限まで好きな本を読んだり、英字新聞を読んだり。至福のひとときです！
8:50 1限 英語学演習。英語で日英の文章構造を比較します。
10:40 2限 大学生の特権、空きコマ。図書館で何冊か洋書を読むことが多いです。下山して友達とお茶したり、早めのお昼を食べたりする人も。
12:10 文学部の友達とお昼ご飯。下宿生のお弁当、クオリティ高い！
13:20 3限 社会文化入門。社会学・地理学・美術史学の先生方によるオムニバス形式の授業です。
15:10 4限 ドイツ語初級。ドイツ語のアルファベットなど、初歩の初歩から学び始めます。活用が多くて頭がごちゃごちゃになりそう…
17:00 5限 古典ギリシア語。ドイツ語を上回る活用の多さ！原文のような活用語尾と格闘しつつ、今使われている英単語の語源と出会うと、親子くると知り合いになったような親しみを感じます。
19:00 帰宅し、寮の友達と一緒に夜ご飯作り。かなり話はずみずみ！
20:00 部屋に戻って大学の予習や復習。
24:00 就寝。

神戸文学部の大きな特徴は、小規模なため学部内で非常に仲良くなれることだと思います。1学年たったの100人！文学部キャンパスに漂う雰囲気も、文学部生の雰囲気も穏やかで、英語の授業の時などに和気あいあいと課題を取り組めます。パソコンの操作が分からず困っていると近くの人々が助けてくれたり、体育では男女関係なくみんなで走者を応援したり、授業中当てられたい人が、一風変わった受け答えをして教室中がどど沸いたり、大学にはクラスがないとよく言われますが、「文学部」というゆる〜いクラスに所属しているような気がします。教授も学生の質問に丁寧に答えて下さいますし、教務の方は、履修登録など大学ならではの仕組みに戸惑う新入生に親切に対応して下さいます。小規模な分、とてもサポートの手厚い学部だと思います！

大学に入ってから、今までできていた範囲がぐうんと広がりました。本当に大学は高校とは違う所です！高校までは、テストの点数で学校生活が決まる、といった部分があると思いますが、大学はそうではありません。どういう意味かという、成績のみでその人が決まらぬ、ということ。サークルに動んだり、ボランティアをやってみたり、学部の勉強に興味を持って、授業で扱う以上にその分野を深めたり、様々なやり方で個性が発揮でき、単なる紙上の数字より、そういったオリジナリティーがその人を決める所だと思います。

あなたも受験で狭まった視野を、神戸文学部で広げてください。大学は、これまでの生活を忘れるほど楽しいところですよ。

学部時代の思い出



大野 裕紀子 (OHNO Yukiko 2017年3月卒業 トヨタ自動車株式会社勤務)

神戸大学文学部での学びの流れを簡単に説明すると、1年生の間は語学と、教養原論と呼ばれる全学部共通の一般教養、加えて文学部の専門科目の入門の授業を受講します。そして1年生の内から文学部の多様な専門を入門的に学ぶ中で、2年生以降に自分がどの専修に進みたいかを考えます。そして、2年生の後期から卒業するまでの2年半は、各専修にて自分の専門を詳しく学び、4年生での卒業論文執筆に向けて勉強を進めていきます。

そして在学中に、自分の専門だけでなく、純文学から社会科学まで多岐にわたる分野に触れた点が非常に有益であり、また同じ学部内で全く毛色の異なる学習を学べる点が、文学部の素敵な所だと私は思います。例えば、心理学専修に進んで以降も受講し続けた美術史の授業で学んだ知識が、ヨーロッパ旅行での絵画鑑賞を非常に実りあるものにし、入門の授業で取り扱った英米文学の書籍が、企業で働いた後に出会った多国籍の人の共通の話題になったりと、

自分の人生や、世界中の人々とのコミュニケーションを数段豊かにする「教養」をしっかりと学べた点が、今の私の財産になっています。

そして自分の専門の心理学について、私は卒業論文執筆に当たって文化心理学を選び、人の心や行動の背景となる文化差について真剣に考え向き合いました。経済学や経営学等学ぶ学生が多い中で、「人の心」に焦点を当て学んだ事が、4年生での就職活動にも大変プラスに作用したと思います。心理学専修では、授業以外でも先生方が社会心理学、認知心理学の様々な実験にお声かけ下さり、海外の先生との共同作業や学会でのポスター発表を始め、積極的に学べる環境がありました。また卒業研究では体系的な要素もあり、自身で実験を計画し仮説を立て検証していくという作業を実際に行い、その中で試行錯誤した経験が今後社会人として仕事をする中でも生きていくと私は思います。

入学から卒業まで

- ① **専修の決定 — 「よく考えて自分の専門を決めることができる」**
文学部には、哲学、文学、史学、知識システム、社会文化という5講座に15の専修があります。1年次の11月末頃に専修を決め、2年生からそれぞれの専修に所属することになります。自分は文学部でなにを研究したいのか、じっくり考えてから選ぶことができます。そのために、各講座ごとのガイダンスとも言える「入門」、人文学への導入をはかる「人文学導入演習」、そして各専修での研究の基礎を身につける「人文学基礎」など、学生の興味・関心に応じて選択できるよう、いくつかの内容に分けて1年生向けの授業が複数開講されています。これらを参考に、自分が進む専門を決定します。
- ② **文学部の授業科目 — 「四年一貫で学ぶ人文学の多様な広がり」**
文学部の学生が4年間に学ぶ授業科目は、全学共通授業科目と文学部の専門科目に分けることができます。全学共通授業科目は、教養科目、外国語科目、健康・スポーツ科学などで構成されています。文学部の専門科目は、基礎科目、自由選択科目、卒業論文関連科目、卒業論文からなります。下の図に履修に関する学年ごとの大きな流れを示します。

1年	2年	3年	4年
基礎教養科目 総合教養科目	基礎教養科目 総合教養科目	高度教養科目	高度教養科目
外国語科目	外国語科目	専門科目	専門科目
健康・スポーツ科学			卒業論文
専門科目 (基礎科目)	専門科目		

- ③ **講義と演習 — 「徹底した少人数教育と課題探究能力の開発」**
文学部で高い割合を占める授業科目が、特定のテーマを探究する「特殊講義」と、数人から十数人で行う「演習」、いわゆるゼミです。実験やフィールドワークを含む「実習」も同じく少人数で行われます。中でも、文献や資料を講読したり、自分で選んだテーマについて研究報告を行い、受講者と議論を戦わせたりする「演習」は、専門分野の研究手法や考え方を習得し、自ら課題を発見し解決する能力を鍛えるうえで大変重要です。
- ④ **卒業論文**
卒業論文は、文学部4年間の学習と研究の結晶です。自分で研究テーマを決め、指導を受けながら、論文作成のための調査や分析も自力で行ないます。これまでに挙げた授業科目から必要な単位数を取得した上で、原則として20,000字(400字詰め原稿用紙で50枚)程度の卒業論文を作成し、口述試験(口頭試問)に合格すれば、卒業となります。

LEIT 2019 発行 神戸大学文学部 〒657-8501 神戸市灘区六甲台町1-1 電話 078-803-5595 http://www.lit.kobe-u.ac.jp/



文学部への好奇心をアップする情報紙

LEIT

FACULTY OF LETTERS,
KOBE UNIVERSITY
神戸大学文学部

2019

文学部の国際交流
日本で勉強して、
世界を発見する

Studying in Japan, Discovering the World

知の現れ、見方、考え方
佐藤 昇 (西洋史学専修)

文学部生になったら
- 在学生・卒業生に聞く -

入学から卒業まで
神戸大学文学部での4年間



日本で勉強して、世界を発見する

Studying in Japan, Discovering the World

大学に課せられた使命のひとつに、公共的である、ということがあります。大学は特定の人たちにだけ、ではなく、世界の人々に広く開かれていなければなりません。ですから、国外からたくさんの留学生がやって来ることは、大学にとってとても大切なことです。

留学生にとって文学部が新しい体験の場であることはもちろんですが、正規生にとっても自分と異なる文化を備えた人たちの出会いは、新鮮な刺激を与えてくれるものです。文学部および人文学研究科にはたくさんの留学生がいます。学部在籍者数はおよそ500人ですが、これに対して留学生は100人程度いるのが通例です（年によって違いはあります）。2018年5月1日現在では、20か国から115人。文学部キャンパスには、ずいぶん高い密度で留学生たちがいるということがわかるでしょう。私たちは、このような多文化の環境を、留学生だけでなく、正規生にとっても意味あるものに育てていきたいと考えて取り組んできました。

大学では、こういう考え方もとづくいろいろな活動を国際交流といえます。国際交流とはこの場合、外国に出かけるとか、英語がうまくしゃべれるとかいうことよりも、言葉や宗教や民族や、おのおのが少しずつ違うことを認めあうための学びの場だということです。ですからそんなに構えることなく（無理に外国語を話す必要もなく）、気軽に加われる場

あることが大切です。

毎年行ってきた国際交流の行事の一つは、創立記念日（5月15日）の授業休止に合わせて出かけるバスツアーです。2018年のツアーでは奈良におもむきました。東大寺、春日大社をめぐった後にイチゴ狩りという行程です。ツアーに参加した学生は44名。うち留学生は中国、韓国、英国、チェコの4か国から24名。残り20名が正規生で、ほぼ同数。国際交流の企画としては良いバランスでした。往路の車内では、ボランティアで参加した藤田先生（歴史地理学）のレクチャー（配付資料つき）もあり、イチゴで名を馳せた奈良の農産物の歴史も知ることができました。

東大寺の大仏殿や、春日大社という代表的な寺社が留学生の興味を引くのはもちろんですが、初の訪問で新鮮な感動を覚えている者が複数いたのは正規生も同じでした。「せめて入場券を買うまでは団体行動！」と言ってあったのに、早くも南大門の手前でグループはあえなく崩壊。近寄ってくる鹿に感激して写真を撮りまくるからで、留学生も正規生もこれは同じでした。イチゴのハウスに放たれた後、貴重な制限時間の間にまず始めるのが写真撮影というのも同じで、筆者にはこれこそ理解不能の「異文化」であったわけですが、摘みたてのイチゴを練乳に浸す風習については、某引率教員のこだわりもむなく、応じた留学生は一人もおらず、正規生たちとの鮮や

かな違いが浮かび上がりました。ともかくツアーが進むにつれて参加者たちはうちとけ、解散の時には留学生とハグして別れる正規生の姿も見られるほどでした。

ところで文学部は2012年から、オックスフォード大学東洋学部と協定を結んで、毎年12人程度の同大学の学部生を1年間受け入れるプログラムを続けています。これをきっかけとして、国際交流にも新しい行事がしだいに加わるようになりました。

そのひとつが、毎月1回開催している交流会です（「インターナショナル・アワー」と私たちは呼んでいます）。留学生だけではなく、正規生も参加して、幅広い交流の機会になるよう心がけています。これまでは、美術史学の先生による日本美術のレクチャー、たこ焼きパーティー、鯉のぼり見学会（夙川）など、いろいろな趣向の企画がありました。

このような気軽な出会いの場が、留学生にとっても正規生にとっても、異文化体験の次の段階に進んでいく入口になればと考えて、私たちは取り組みを進めているところです。

留学生担当
真下 裕之



LET MESSAGE BOX



去年の秋、神戸大学での一年間の留学を始めました。私の専攻は「日本学」ですが、日本語だけではなく、文学や歴史学から心理学に至るまでの様々な科目を、日本の大学生と一緒に講義を受けています。私は将来、日本の大学院に進学したいと思っていますので、これは貴重な経験だと思います。また、神戸大学生の先輩であるKOJSPチューターをはじめ、多くの日本人に会って友達を作るきっかけにもなります。しかし留学生であるのは、いつも楽なわけではありません。外国に引越して、慣れない環境で暮らすことは大変難しいのです。なぜなら、生活でのすべての会話を日本語でしなければならないと、自分の国とは違った礼儀や習慣に出くわして、乗り越えなければならないことが多いのです。ですが、チューターさんや友達の助けを借りて、このような難しいことに前向きに取り組むことで、日本語が上達するばかりか、人としてもずいぶん成長すると思います。留学生活はとても楽しいので、イギリスに帰るのは名残惜しくなるでしょう。

Wollaston George
(KOJSP留学生、イギリス)



半年前ぐらいに日本へ来て、これまで神戸での生活をとても楽しんでいます。留学するという事は、学的な経験だけではなく、自国と違う文化や社会にだんだん慣れてきて自分を成長させることです。ただ、最初に何よりも私を困らせたのはカルチャーショックではなく、毎朝大学まで山を登ることでした！神戸大学には、世界各国からの留学生や外国人の先生もいて、インターナショナルな雰囲気が感じられます。私はいまのところ日本語のレベルが少し足りないで、まだまだ日本語での授業を受講できず、受けている授業のほとんどは英語で教えられているものです。これらの授業は、日本人の学生にとっては英語の勉強や留学生と知り合う良いきっかけになると私は思います。もし恥ずかしくて外国人の留学生と話せなかったら、気にしないでください！実際、多くの留学生は勉強だけのために日本に来ているわけではなく、新しい友達を作りたい人も多いためです。

慣れた環境を離れて、今までと違う世界に一人で向き合ってきた。振り返ると寂しい時期もありましたが、今は神戸大学で1年間留学することができて本当に運がよかったですと思っています。神戸大学の一番の良さは学生間のコミュニケーションにあると思います。私は神大生と話すことを通じて、グローバル時代のリーダーらしい心掛けができていると感じました。また、皆さんは留学生の私がいまの日本語のレベルが少し足りないで、まだまだ日本語での授業を受講できず、受けている授業のほとんどは英語で教えられているものです。これらの授業は、日本人の学生にとっては英語の勉強や留学生と知り合う良いきっかけになると私は思います。もし恥ずかしくて外国人の留学生と話せなかったら、気にしないでください！実際、多くの留学生は勉強だけのために日本に来ているわけではなく、新しい友達を作りたい人も多いためです。



これからもっと頑張って、この留学経験が実を結ぶように一生懸命に勉強していきたいです！

Perrone Francesca
(交換留学生、イタリア)

慣れた環境を離れて、今までと違う世界に一人で向き合ってきた。振り返ると寂しい時期もありましたが、今は神戸大学で1年間留学することができて本当に運がよかったですと思っています。神戸大学の一番の良さは学生間のコミュニケーションにあると思います。私は神大生と話すことを通じて、グローバル時代のリーダーらしい心掛けができていると感じました。また、皆さんは留学生の私がいまの日本語のレベルが少し足りないで、まだまだ日本語での授業を受講できず、受けている授業のほとんどは英語で教えられているものです。これらの授業は、日本人の学生にとっては英語の勉強や留学生と知り合う良いきっかけになると私は思います。もし恥ずかしくて外国人の留学生と話せなかったら、気にしないでください！実際、多くの留学生は勉強だけのために日本に来ているわけではなく、新しい友達を作りたい人も多いためです。



また、神戸大学の先生方は学生に熱意をもって真剣に接してくれます。特に国文学専攻の教授は、授業中に理解しやすい例を挙げてくださったり漢字を分かりやすく書いてくださったりしました。そのお心遣い大変感謝しております。そして私はこの神戸での生活をきっと忘れないでしょう。神戸はとっても景色が美しい所です。六甲山から眺める夜景は本当に素晴らしいと思います。神戸大学に入学の機会があれば逃さないようにしてください。

金 鮮玎
(交換留学生、韓国)

知の現れ、見方、考え方

法学部では法学、経済学部では経済学を学ぶ。自然と思ひ浮かぶことでしょうか。では、文学部とは何を学ぶところなのでしょうか。いざさか難問かもしれませんね。実際、文学という言葉が想起させる小説や戯曲、詩などについて学ぶばかりではありません。哲学、歴史学、美術史学、言語学、社会学、心理学など多様な学問を対象としており、扱う時代や地域なども様々です。強いてまとめれば、私たち人間の知性がどのように発現するのか、「知の現れ」について学んでいると言っているのかもしれない。人間が知性を働かせて作り出した／している思想や芸術、言葉、組織、集団、制度にはどのような特徴があり、時代、地域、個人や集団によっていかなる特性、共通性があるのか。あるいはそもそも人間が働かせる知性にはどういった性質、限界、可能性があるのか。さああたり、こんなことが文学部の学びなのかなと考えています。

神戸大学文学部では各学生が2年次以降、こうした学問分野から専門分野の一つを選び、学んでゆくことになります。さて専門で学ぶというのはどういうことなのでしょうか。もちろん人や事象の名前を覚え、新たな知識・データを蓄えるという側面もありますが、しかしそれと同時に、あるいはそれ以上に「見方、考え方」を鍛え、養うのが、主たる専門での学びなのではないかと私は考えています。人間の知性が作り出すものは、芸術であれ、組織や制度であれ、想像をはるかに超えるほど複雑で、不確実な要素を孕み、時の経過とともに揺らいだりもします。全体をまるごと理解することは困難です。どこかに視点を定め、見える限りのものをできるだけ正確に観察してゆかざるをえないのです。ではどこから眺めればより見通しが利くのか。どこに注目すると細部に目が届くのか。視点の置き場所次第で見える世界も異なってきます。さらに視界のどこに焦点を合わせ、どのように整理すると、理路が整い、他人にも分かりよい説明ができるのか。逆に、視点を一つに定めると、視界から消失するものは何なのか。明快に整理することで、零れ落ちるものは何なのか。そうした点も含め、批判的に物事の「見方、考え方」を学ぶこと、講義や演習、卒業論文の制作などを通してそうした力を養ってゆくことが、専門での学びの一

つなのだろうと思います。自ら主体的に思考し、複雑な社会、混迷を極める世界に對峙してゆくための力を養う場といっても良いのかもしれません。

ところが物事をより深く探求しようとする、学問は専門性を増し、断片化してゆく傾向も孕んでいます。専門を追求するあまり、複雑で、変容を続ける人間の知性を、社会を、この世界を正しく理解できなくなるおそれもあるのです（研究者を目指す多くの学生たちにも、この点はとても大事なことだと思います）。幸いなことに、コンパクトながら多様な専門分野で構成される神戸大学文学部は、分野間の交流も盛んで、複数の「見方、考え方」に触れること、さらに専門分野の「見方、考え方」を批判的に見つめ直すことも決して難しいことではありません。私自身、他分野の先生から刺戟を受けることが少なくありません。目下、古代ギリシアの民主政と修辞文化について研究していますが、心理学の先生に意見を伺ったり、文学の先生から刺戟を受けたりしたこともあります。先に日本史、東洋史、西洋史の教員が、専門の枠を超えて各々の「見方、考え方」を示した『歴史の見方、考え方：大学で学ぶ「考える歴史」』（山川出版社、2018年）を出版しましたが、これもそうした営みの結晶と言えるでしょう。学生たちも専門以外の授業に出席して多様な「見方、考え方」に触れ、多元的な「見方、考え方」を身につけようとしています。留学生との交流も盛んで、これもまた「見方、考え方」を見直す良い機会になっているようです。既存の視点に囚われ、固着した思考をくり返すばかりでは新しい価値を生み出すことなどできないでしょう。専門の学びを通じて培われる力が、不自由さの檻の中に閉じ込められることのないよう、いくつもの手が差し伸べられているのかもしれない。

佐藤 昇 准教授（西洋史学専攻）

